

ウルク遺跡を訪ねて

沼本宏俊

Hirotoishi NUMOTO

Visiting the Ruined City of Uruk

2001年3月末にメソポタミア文明発祥の中心地、ウルク遺跡を18年ぶりに訪ねた。今回、イラクに渡航したのは3月20日から26日までバクダットで開催された国際会議「メソポタミアにおける文字の歴史5千年」に参加したためだ。同会議はサダム・フセイン大統領と情報文化省により主催され、イラクを主とした西アジア地域を研究の対象にする言語学及び考古学の研究者が、欧米諸国から約200人、イラク国内とアラブ諸国から約200人が招待された。なお、日本からの参加は筆者と国土舘大学イラク古代文化研究所の大沼克彦教授の2人であった。同会議の初日から4日間は研究発表に、後の3日間はウルク、バビロン、アッシュール、ニネヴェ、ニムルド、ハトラといった主要遺跡の視察に充てられ、この機会にウルク遺跡にいったわけである。

バクダットからウルク遺跡までは車で約5時間を要する。サマワ市で幹線を離れ田園の中をしばらく走ると地平線の中に忽然と巨大な丘陵が現れる。これがウルク遺跡で、テルの総面積は約400haだという。バスの車窓から眺めた風景で特筆しておきたいのは、ウルク周辺の土地はバビロンの周囲に比べ塩害がひどく休耕している畑が目立つことだ。麦が芽吹く季節だったので、実際に耕作が行われているのは耕地の5分の1程度にしか過ぎないことが確認できた。ウルク遺跡に到着しエアンナ地区の北側にあるドイツ隊の宿舎に案内されたが、そこには数名のスタッフが駐在しており、湾岸戦争後休止していた調査の再開に向け準備をしているところであった。

では、ウルク遺跡で発掘された遺構の中でも、常に脚光を浴びているウルク後期の建築遺構の現状について、印象に残っていることを簡単に報告しよう。まず、アヌ地区にある約70×66m、高さ約13mのいわゆる「アヌのジググラト」は、周知のようにウバイド期から同じ場所に神殿が何度も繰り返して拡張されて、建て直された結果できた日干し煉瓦造の基壇で、アッカド期以降メソポタミアの主要都市に建造されたジググラトの起源とみなされている(写真1、2)。この基壇の西側方向にはテルは形成されてなく、視界が開けて眼下には地平線が広がっており、基壇上に建造された白色神殿は遠くからも眺めることが可能だ。この基壇の西側斜面の一部は修復されているが、ほかの部分の修復は行われていない。東側斜面につくられた基壇の上に通じる通路の浸食も激しく、階段跡も確認できない。一方、基壇上のジェムデド・ナスル期に創建されたといわれる

22.3×17.5mの三列構成のプランをもった白色神殿跡は、発掘後なんら保存修復はされないまま70年近く風雨にさらされているため、高さ1-1.5mほど残存する外壁や扶壁は著しく浸食され原形を留めていない(写真2、3)。壁面に塗られた白色プラスターのほとんどは剥落し、壁がなんも確認できない状態だ。三列構成の中央の居室に設けられた供物台や祭壇もわずかにその痕跡を留めるものの、このままの状態に放置しておけば、近い将来には必ず跡形もなく消滅してゆくに違いない。メソポタミアの神殿を語るうえで不可欠な建築遺構の崩壊を、早急にくい止める必要があると感じた。アヌのジググラトの西側直下に建造されたウルク後期の「シュタインゲボイデ」と呼ばれている26×22mの方形の石積み壁(平らな石灰岩と日干し煉瓦の交互積み)が三重に廻る用途が不明の建物跡は修復されており、保存状態は比較的良好(写真1)。

エアンナ地区のウルク後期に建造された一連の神殿遺構群も修復されたものは一つもないうえ、白色神殿と同様に発掘後、長期間にわたり雨ざらしの状態にあったため、壁



写真1 アヌのジググラトと「シュタインゲボイデ」



写真2 アヌのジググラト上の白色神殿



写真3 白色神殿の主室

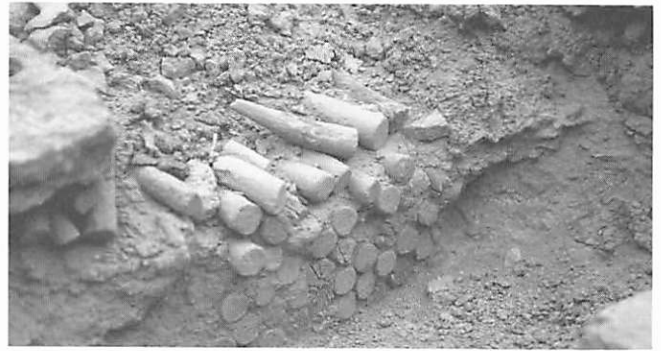


写真5 クレイコーン・モザイクの壁跡



写真4 エアンナ地区とウル第3王朝期のジググラト



写真6 石製コーン・モザイクの壁跡

跡の浸食がひどいのが現状だ(写真4)。クレイコーン・モザイクの列柱神殿に代表される4b層の神殿群(写真5)や建物F、G、Hと4a層のD神殿、列柱広間等の新旧の巨大公共建物群は複雑に重複しており、ただでさえ、そのプランを識別するのは困難なうえに、壁跡の遺存状態がきわめて悪く、こうした壁跡がいったいどの建物に相当するものか特定するのは不可能に近い。かつて同遺跡の調査隊長を務めたニッセン教授らの案内なしには、建物跡の配置関係をまったく理解することはできなかった。「石製コーン・モザイクの神殿跡」は、神殿群の中では最も古い6層期に建造されたと考えられており、4a、b層の神殿群よりやや離れた場所に孤立している。29×19mの神殿の外側を取り囲む周壁の壁面が石製のコーン・モザイクで飾られているわけだが、コーン・モザイクが認められる部分はわずか1.5mほどの範囲で(写真6)、この部分を撮影した写真がウルク遺跡を紹介した本には必ずと言っていいほど掲載されている。このコーン・モザイク壁も野ざらしになってい

るため、埋没が進み壁面の露出した部分が以前訪れた時に比べて非常に少なくなっており、このままでは20年ほどすれば完全に埋没してしまうだろう。この付近にはさまざまな色の石で造られたコーンが散乱しており、なかには製作途中で廃棄されたコーンも多数認められた。「石製コーン・モザイクの神殿跡」が廃棄された後、この付近には4a層期に「リームヘン煉瓦の建物」が建造されるが、壁跡は崩れ、畦状に土の高まりになっており、かすかに建物のプランが把握できる状態であった。

以上、ウルク後期の遺構についてふれてみたが、ほかの時期の建築遺構、たとえばカッシート朝のカラ・インダッシュ神殿跡やセレウコス朝のイリガル宮殿跡などは、焼成煉瓦で建造されているため、あまり風化は進んでなく保存状態は良い。当日はあいにく季節の変わり目に吹くアジャージに遭遇し、終日砂嵐が吹き荒れ、一時はひょうも降ってきた最悪の天気であったが、ウルク遺跡の壮大さを再認識することができた一日であった。

国土舘大学体育学部
Faculty of Physical Education, Kokushikan University